

社会学における歴史認識をめぐって

ードイツロマン主義と米国プラグマティズムー

松 岡 雅 裕

1. 問題設定（ドイツ社会学とアメリカ社会学にみられる歴史認識）

2017年度日本大学社会学会大会（7月22日開催・於日本大学文理学部）のテーマ部会では、2015年度から継続してきた学説史研究における伝統再考の試み（2015年度のM.ヴェーバー、2016年度のE.デュルケム）の最終的考察として、社会学説が歴史をいかに認識してきたかを課題としました。とくに、ヴェーバー、デュルケムと続いてきた流れとしては、最終年度にぜひアメリカ社会学にも言及したいという思惑も絡み、今回のテーマ部会設定の運びとなった次第です。

ところで、今回ポイントとなるアメリカ社会学の伝統を考えるに、その二大潮流、つまりシカゴ学派とハーバード学派においてさえ、ドイツ社会学の影響を無視することは不可能であることにあらためて気づかされます。例えば、ドイツ留学中にG.ジンメル薫陶を受けたR.E.パークは、学位論文「群集と公衆」をものして集合行動論の先駆けをシカゴに根付かせることになり、ドイツ・ハイデルベルク留学中のT.パーソンズは、ご存知の通りヴェーバー社会学の洗礼を受け、学位論文「ゾンバルトとヴェーバーにおける資本主義概念」の執筆、やがてはハーバードに主意主義的行為理論の伝統を根付かせます。さらに深読みするならば、第二次世界大戦中の米独という相対立する両国の橋渡しともいえるべき役割を果たした亡命社会学者たち、例えばM.ホルクハイマー、T.アドルノ、そしてE.フロム等々といったフランクフルト学派研究者たちの影響も無視できません。

以上のような経緯を踏まえ、アメリカ社会学を中核に置きつつ、ヨーロッパ的伝統にも言及するテーマ部会の総括的課題「社会学における歴史認識」が設定されました。結果、アメリカ社会学の学説史研究においてユニークな見解を展開されている鈴木健之氏、ドイツ社会学はもとより歴史

学にも造詣の深い犬飼裕一氏を登壇者とする人選も確定された訳です。本論は本テーマ部会の趣旨に沿った解題であると同時に、以下に展開されるであろう議論の序章として、その前史的段階をなす学説状況を叙述することで、テーマ部会のさらなる理解に寄与することを目的としています。

2. ドイツロマン主義に対する社会学の対応(歴史に目的はあるのか?)

さて、現代アメリカ社会学の成立に大きな影響を与えたと考えられるドイツ社会学ですが、ドイツ社会学でイメージされるのは、ヴェーバーであり、テンニースであり、またジンメルといったところが今日一般的です。しかし、筆者の学部生時代には、ドイツ社会学のいま一つの重要系譜として、ドイツ生物学的社会学理論に対する言及が盛んになされていました。つまり、オーストリアのL.グンプロヴィッチやG.ラッツェンホーフア等が展開しドイツ社会学に絶大な影響を与えた議論です。今日、この系譜に対する言及はほとんど目にするものがなくなっていますが、しかし、筆者の見るところ、この生物学的社会学に対してヴェーバーらが挑んだ理論的対決が、草創期ドイツ社会学の確立に大いに寄与したと考えられるのです。つまり、後述するドイツロマン主義とヴェーバー社会科学論の対峙という重要な問題、かつ、歴史に向き合う社会学の対照的なスタンスの存在がそこには垣間見られるのです。

筆者の管見では、ドイツロマン主義の思想系譜の中で、社会や文明の在り方にまで言及した第一人者は、イエナ大学のE.ヘッケル(1843-1919)と思われます。ヘッケルは、「個体発生は、系統発生を繰り返す。」という生物発生学でよく知られた命題でお馴染みの研究者ですが、彼はチャールズ・ダーウィンの生物進化論の継承発展を担うのみならず、それとドイツロマン主義の思想的エッセンスを融合させた思想家でもあったといわれています。この点に関しては、わが国の科学史研究の第一人者・米本昌平氏の分析(1980, 1981a, 1981b, 1982)が白眉と思われますので、ここでは、氏の考察を参考にしながら説明させていただきます。

もともとヘッケルは、ドイツロマン主義の思想家としても著名な文豪ゲーテのメタモルフォーゼ論や思想家シェリングの世界霊究明論を自己の知的守護神のように扱っていた(崇めていた?)と言われていました。ダーウィンからの影響で育んだ自己の進化論的世界観(自然淘汰!)とこのロマン主義的な発想でもって、自然な生命力の躍動を賛美するというスタン

スを身に付けたのでしょうか。彼は、弱肉強食を是とする古代スパルタ社会を理想化し、生得的能力の序列による前近代的な職業的身分制社会の建設を提唱し始めていました。同時に、文明社会がその福祉保障制度で、劣った生得的能力保有者を救済することに対しては異議を申し立てたともいわれています。ヘッケルにとって自然は、そして宇宙は有りのままが望ましく、人為的な救済をしないことが自然に適う文明形態であったようです。このような進化論的かつロマン主義な発想の延長に、彼の文明観は、物質化された人為的な都会生活よりも、田園での自然な牧歌的精神生活を重視する農本主義的志向、ドイツの伝統的な保守的心情に吸収されていきました。

さらに、グンプロヴィッチやラッツェンホーファ等の生物学的社会学理論の興隆、そしてユダヤ人資本家の台頭による反ユダヤ感情の高まりの中で、ヘッケルの思想はいとも簡単に（すでにJ.A.ゴビノーやH.S.チェンバレンが提唱していた）ゲルマン民族・チュートン人種優秀論と結びついていきます。この時期、ヘッケル思想を普及させたW.ボルシェによる解説書は、青年期ヒトラーの愛読書になったそうです。この反動的ともいえる生物学的なロマン主義思想は、やがてヘッケル自身が名誉会長を務める「一元論同盟」や、彼の弟子ヘンツェルンによる人種主義的帰農運動団体「アルタム同盟」の結成で、当時のドイツに危うい政治的潮流を生み出していきました。現に、これら団体に、のちのナチス農村派と呼ばれる主要メンバーたち（ナチス親衛隊総統となるヒムラー、ナチス食糧大臣となるダレ、さらにアウシュヴィッツ収容所長となるヘスら）がことごとく参加していた点は無視できません。

米本氏の考察によると、20世紀を目前にした1900年1月1日付で、ドイツ軍需鉄鋼産業クルップ・コンツェルンのA.クルップにより興味深い懸賞問題が公示されたそうです。課題は、「国家の国内政策の発展およびその立法に関してわれわれは進化論の原理から何を学ぶか」というものでした。この公示に対して多数の応募があり、第一位には、W.シャルマイヤーの「遺伝と淘汰」論文が選ばれます。これは後に『自然と国家（自然科学的 sociology 説への寄与）』と題して公刊されたようですが、この懸賞問題とその入賞論文に対しては、テンニースが詳細な批判を加えました。本能的な動物一般の行動とは区別される人間に特有の「意志」、そして「道徳観念」の成長に主眼を置き『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』を執

筆したテンニースならではの反論であったことは十分に推察されるでしょう。このテンニースの批判に対してシャルマイヤーが応戦し、ここにテンニース＝シャルマイヤー論争が発生しています。さらに1905年には、ドイツで世界初の優生学会「民族衛生学会」がA.プレッツという人物によって設立されました。これがドイツ民族の純粋な血統を保護することを目的とした民族主義的な優生学会であることは明らかで、当のプレッツは、1910年のドイツ社会学会大会で、「人種概念と社会概念」と題する研究報告を行っています。この報告に対しては、出席者のヴェーバー、そして座長を務めたゾンバルトから手厳しい反論がなされたそうです。ゾンバルト曰く、「社会学会は生物学との利益共同体は作れない」と。

これら一連の経緯には、ドイツロマン主義と近代社会学における歴史認識の相違が明確に表れているように思えます。ヘッケル以来の進化論的なロマン主義に限定すると、そこには、明確な歴史上の目的意識の存在が見て取れます。それは、歴史の導きの糸ともなる神秘的な生命力といったものに対する確信、この生命力の自然な展開としての属性主義的社会システムの肯定とそれを保証する伝統的農村生活の理想化。同時に、生命力の自然な発露を妨げる都市文明、そして自民族の伝統性にとって異質な他民族・人種に対する徹底的憎悪。近代社会学の本格的な構築を企図していたヴェーバーやゾンバルトたちが、この似非科学ともいえるロマン主義的な生物学的社会学理論に対して徹底的な反論を下した理由は明らかでしょう。それは逆に、近代社会学における科学的歴史認識の何たるかをも教えてくれるはずです。

ヴェーバーは、第一次世界大戦前後の時期、『世界宗教の経済倫理』構想の一環として、今日『宗教社会学論集』に含まれている「中間考察」の中で、政治経済領域の非人格的な官僚制化と、救いを目指す宗教や美による救いを目指す芸術との間に発生する緊張関係に言及しています。その時代背景として、私たちが注目しなければならないのは、すでに合理化の渦中にある既成宗教や芸術とは異なる新たな宗教・芸術への大衆の絶大な渴望の存在、そして現に非合理主義的な神秘主義が流行していたことに対してヴェーバーが危機感を持っていたという事実です。近代の圧倒的な合理化・官僚制化の傾向に直面しても、なお個人主義的な自由を救い出すことは可能か。この歴史的傾向と事態から目を背け、いたずらに理想を追い求めることを拒絶し、むしろ、時代の運命としてそれを（無意味化の恐れに

耐えながらも) 一身に引き受けつつも、自らの行為に対する責任を全うする人間の強さに期待した1919年の『職業としての学問』や『職業としての政治』は、まさしく歴史に対する責任倫理の重要性に関する彼の遺言と見做していいでしょう。この歴史と目的に関しては、つづく犬飼裕一氏のさらなる考察に期待いたします。

3. 草創期アメリカ社会学とプラグマティズム (能動的な社会構築への途)

さて、今回議論の中心となるアメリカ社会学ですが、シカゴ学派やハーバード学派が本格的にその活動をスタートする以前のアメリカ社会学草創期は、ご存知のようにH.スペンサーの社会学(社会進化論)の圧倒的な影響下にありました。スペンサー社会学の登場時期に本国英国では、すでに資本主義の悪弊(労働環境の悪化、貧富の格差等)が噴出し産業革命の栄光に翳りを見せ始めていましたが、米国においては、膨大な資源を埋蔵させる広大なフロンティアと労働力を背景に、まさにアメリカ産業革命は本格的に始動し明るい未来を謳歌していました。この産業経済発展段階の違いが、本国英国以上に米国でスペンサー社会学が好意的に受け入れられた理由だったのかもしれませんが。スペンサー自身、米国マスコミ界からの要請で主要紙に連載記事を投稿したり、米国各地への講演旅行と多忙な日々を送っています。

では、草創期アメリカ社会学界は、無条件にスペンサー社会学を受け入れていたのかというと、決してそうではありませんでした。むしろ、スペンサー社会学の根本的原理に潜む問題点との格闘に苦心していたようです。このスペンサー社会学の根本的原理に潜む問題点とは何か? 筆者は、以下の二点がその代表的なものだと考えています。まず、その不可知論的な見解、つぎにその一元論的な発想です。スペンサーは、1850年のSocial Staticsと1862年のFirst Principlesで自己の不可知論的、かつ一元論的な見解を披露しています。ここで一元論的というのは、無機的宇宙から生物・人間社会の有機的世界に至るまでの進化的連続性が、「力の持続性(persistence of power and/or force)」原理に導かれているということです。しかも、その「力の持続性」原理を生み出すものは高次元領域の「不可知なるもの(unknowable something)」であると説明されています。つまりスペンサーは、何が進化を推進する根本的な力なのかを明確にはしない不可知論

者でした。英国功利主義思想によくみられる、宇宙の法則に順応しさえすれば、やがてすべては調和されていき、到達点としての有機的社会的完璧な平衡状態・究極的均衡 (ultimate equilibration) への移行は必然であるとする決定論なのです。これに対して、アメリカ社会学草創期を代表する W.サムナーは、このような不可知論を前提とするスペンサー社会学を主知主義的に転回させた代表的論者でした。彼は、「宇宙の法則に順応しさえすれば」といったスペンサーの楽観的な進化決定論に対して、マルサスのなペシミズム的相対化と、環境に対するプロテスタント的能動姿勢を対峙させようとした論者であったといえます。つまり、カルヴィン主義的予定調和の世界にプロテスタンティズムの倫理でもって従うことが、マルサスのなペシミズムの世界から脱出する最善の途であると主張し、プロテスタントの能動的倫理的な生活姿勢こそが社会進化の根本的な力であると主張したのです。サムナーは、スペンサーの進化主義を世俗的かつ現世志向的な主知主義へとモラリスト的に転回させたといえるでしょう。

一方、スペンサーの一元論に対しては、L.ウォードの社会学思想がその転回例の代表的なものといえます。スペンサーは、無機的な宇宙から有機的世界に至る一元論的な進化法則に対して絶大な信念を持った思想家でしたが、ウォードは、無機的宇宙から動物段階の有機的世界に至る進化と、人間段階の社会的進化に明確な相違を認め、前者を動物的無目的進化 (law of genesis)、後者を精神的意図的進化 (law of teresis) と名付けて、進化を二元論的に把握しようとしていました。それは、1883年の Dynamic Sociology の中で、自然経済の浪費性に対して人間行為の経済性および合理性の指摘をなし、行為における目的論的過程の力学を探究したことが発端になったといわれています。彼は、社会主義や個人主義に代わる第三の道としての積極的計画管理を目差す目的啓蒙政治 (sociocracy) の必要性を主張し、万人の知性が自覚的に拡大するような教育効果の拡大に支えられた能動的社会の構築に期待したのです。このように、アメリカ社会学草創期においては、スペンサーの社会進化論に影響を受けつつも、その不可知論と一元論を克服し、実践的な主知主義を原理としつつ、啓蒙的かつ能動的な社会構築を目指すアメリカ社会学の根本思想が形作られたと言っていいでしょう。同時にそれは、アメリカ社会学における歴史認識の在り方への明確な意思表示であったと思われます。

同様に、当時ヨーロッパ思想の後塵を拝していたアメリカ哲学界でも、

スペンサーの社会学思想は問題視されていました。いうまでもなく、プラグマティズムからの挑戦です。プラグマティズムの基礎を築いたCh.ライトとC.パースは、スペンサーの不可知論的な進化決定論に対して、現実には予想外の新経験に満ちており、科学法則の観点からしても絶えず不規則的例外事項と遭遇する点に注意を喚起すべきだと反論しました。これも、やはりスペンサーの不可知論的決定論に対する倫理的反駁とみられます。さらに同じくプラグマティストのW.ジェームズに至っては、スペンサーの決定論的な必然性の哲学は、人間を倫理的・審美的荒廃に導く哲学体系であるとまで酷評しています。ジェームズにとっては、世界における最小限の不確定性の存在こそが、能動的な生活姿勢による倫理再生の可能性を保証しているのだと。彼は、プラグマティズムの使命は、不可知論的な決定的因果網から人間の主体性・自発性を、そして世界の可能性を導く不確定性を救出することにあると考えたのでした。ここには、草創期のアメリカ社会学と同様、歴史は創造されるものであるという認識が見て取れます。

ここで注目したいのは、初期プラグマティズムの完成者であり、稀有な実践家でもあったJ.デューイの思想です。彼の思想は、哲学の領域にとどまらず、教育学や社会学にも多大な影響を与えたことはご存じの通りです。学説史上では、デューイは、進化主義におけるインテリジェンスの役割を未決定な状況内部での重要機能として意義づけた「可能性の哲学者」として特記されます。しかし、1929年に発生した大恐慌とそれに続くニューディール期における環境操作・環境設計の思想ともいえる彼の発言と取り組みには、近代社会科学全般が遭遇するかもしれない危うさが潜んでいました。デューイのプラグマティズム思想を一言で述べることは難しいのですが、人間が世界に適応していく過程でみられる「探求のプロセス」を明らかにした点が、まず挙げられるでしょう。すなわち、未解決の問題状況に対して、われわれが取り組むべき問題をいかに設定するか、さらに仮説→推論→実験を経て保証された命題を生み出し、経験的知識をいかに増大させていくかという一連の過程分析です。つまり、探求のプロセスとは、不確定で不確実な状況から、安定した適応状況への移行を導くものであると規定したうえで、そのプロセスを、有機体と環境の相互作用による不均衡状態の解消・統一のうちに見出した訳です。ここでデューイは、必然的法則性に従う「理性」よりも、実験主義的「知性」の創造的役

割の重要性を強調しました。しかもデューイは、かつて先人たちがスペンサー社会学との格闘のなかでなしえた一元論の乗り越えという課題を、独自の発想で達成しています。それは、一元論を乗り越える二元論の提示のみならず、さらには新ヘーゲル主義的な両者の弁証法統一の構想、最終的には、「理性」の働きを重視する新ヘーゲル主義的先験的論理学をも乗り越えた「知性」に基づく実験主義の提唱という新たな次元にまで肉迫しているのです。

さて、話題をデューイの実践的実験主義的な取り組みに戻すと、大幅な景気後退の予兆が見られた大恐慌前夜の1929年9月、デューイは独立政治活動連盟の初代会長に就任し、その就任演説で既成政党による自由放任経済体制が失敗に帰したことを確信表明します。以後、社会の変革事業に参画するデューイの論調と、ローズベルトが推進するニューディール政策は、まさしく歴史的に交差するかのように進行していきました。1935年の『自由主義と社会的行為』で主張されたように、自由放任経済体制終焉後の「新しい自由主義は、歴史的変化に即して政策を選ぶ実験主義の立場である。」というのが当時のデューイの信念であり、彼はローズベルトのニューディール政策を積極的に支持します。しかし、完全雇用を実現させるための偉大なる実験ともいべきニューディール政策が軌道に乗りつつあった1937年8月、米国は再び大恐慌を上回る景気後退に直面します。もはや、偉大なる社会的実験ニューディール政策による完全雇用の実現は誰の目にも期待薄となり、むしろ完全雇用政策以外の部門での恒常的な巨額赤字支出による新たな積極的財政支出政策の開拓が必要となっていきました。一方この時期、ニューディール政策とは別に、ローズヴェルトは国際関係のきな臭さを鑑みて、1938年1月、枢軸国対策のために軍備拡張の必要性を主張し10億ドルにのぼる軍備拡張案を議会に提出します。「瓢箪から駒」とでもいのでしょうか、この軍備拡張策が、ニューディールに代わる恒常的財政支出を効果的に活用できる重要な部門「軍需産業」の発見につながっていきました。この軍備拡張策による軍需産業の活況が、10年以上も続いた大恐慌からの（ニューディールに代わる）新たな脱出糸口になっていくわけです。皮肉にも、まさしく死の商人たる軍産複合体を核とする国家独占資本主義体制が、長引く大恐慌の苦しみから人々を救い出したのでした。

しかし残念なことに、この時期に至っても、デューイは未だ修正資本主

義という仮面の裏に国家独占資本主義が顔をのぞかせていることに気づこうともせず、実験主義に支えられた自由主義体制に対する自己の楽観的な期待感に固執しつづけていたといわれています。現に、民主主義的ヒューマニストを自任していた彼も、1939年9月にドイツ軍がポーランドに侵攻すると途端に発想を翻し、ナチズムの脅威を打ち砕かんがため、アメリカが民主主義の「兵器庫」の役を努めるべきだと主張し始めますし、1941年12月、日本軍によるパール・ハーバー攻撃の報に接すると、アメリカの戦争参加を積極的に支援しだしたのです。ファシズムを生み出したヨーロッパとアジアの国家独占資本主義に対する不安が理解できずにいたのでしょう。以上のアメリカ社会学草創期の社会学者たち、およびプラグマティストたちに関しては、筆者の考察(1987, 1988)を参照していただければ幸いです。

4. 結語に代えて

アメリカン・サイエンスの誕生といわれた草創期アメリカ社会学とプラグマティズム。そこに見られた能動的社会構築の理想を吹き飛ばすかのような勢いで、アメリカ国家独占資本主義は、その強靱なドルと軍事力で戦後バクス・アメリカナを実現していきます。アメリカ社会学の領域で、軍産複合体を告発するS.ヴェブレンやパワー・エリートが徘徊するアメリカ民主主義の危険性を指摘したC.W.ミルズの言説が登場したことは、まこと郁子(ムベ)なるかなといえます。巻頭で、筆者は、ドイツ社会学とアメリカ社会学の交流を簡単にスケッチしました。シカゴ学派やハーバード学派の興隆はもとより、第二次世界大戦中のフランクフルト学派の亡命研究者たちも独米交流の重要な一翼を担っていたわけです。しかし、フランクフルト学派の亡命者たち、とくにM.ホルクハイマーとT.アドルノが亡命先の米国で目撃したのは、自分たちを救い受け入れてくれた自由で平和な国家アメリカではなく、資本の力に翻弄された文化的「暴力」の嵐が吹き荒れるアメリカでした。二人にとっては、大衆の憧れであるアメリカを代表する文化の発信地ハリウッドまでが、アメリカンナイズされた規格品を大量生産し、アメリカの覇権的イムズを侵略的ともいべき形で世界に輸出していたのです。少々悲観的な最終章となってしまいましたが、社会学は、はたして世界の危機的状況に対峙するだけの強靱な歴史観を構築してきたといえるのでしょうか。ポイントとなる戦後アメリカ社

社会学の歴史認識に関しては、鈴木健之氏の論に期待したいところです。

最後になりましたが、「社会学における歴史認識」、このテーマは、ポスト・パーソンズの時代における社会学の主要テーマであったはずだということを再認識しておきたいと思います。かつてアルヴィン・グールドナーの『西欧社会学の危機の到来（邦題：社会学の再生を求めて）』（1970, 1971）で公示された問題提起もここにこそありました。今日、社会学史を学ぶ意義もここにこそあると思われまます。社会学界の現況を反省する意味でも、また、今後社会学が力強く再生していくうえでも、日本大学社会学会大会のテーマ部会「社会学における歴史認識」という問題設定には、じつに意義深いものがあると思われまます。

文 献

- 松岡雅裕，1987，「社会進化論における『力』概念の変容」『社会学史研究』第9号，日本社会学史学会。
- ，1988，「危機の時代におけるアメリカ社会進化主義——悲劇の予言者ヴェブレンと未来を構想するデューイ」『社会学論叢』No.101，日本大学社会学会。
- 米本昌平，1980，「現代史のなかの優生学——岐路に立つ生命観」『技術と人間』1980-3号，技術と人間社。
- ，1981a，「社会ダーウィニズムの実像——欠落した思想史」村上陽一郎編『時間と進化』東京大学出版会。
- ，1981b，「優生思想から人種政策へ——ドイツ社会ダーウィニズムの変質」『思想』1981-10号，岩波書店。
- ，1982，「社会ダーウィニズムの実像に迫る」『科学朝日』1982-4号，朝日新聞社。